

入院時、基礎疾患の3割以上は放置されており、術前に基礎疾患に対する治療が必要となったものは、経過観察中の疾患も含め、約2割に認められました。

以上の結果より口腔外科的処置を行うにあたっては基礎疾患の状態を十分に把握検討し、基礎疾患を十分にコントロールすることの重要性が改めて確認されました。

29. 北海道社会保険中央病院歯科口腔外科開設9カ月の動向

秋月 一城, 田中 久美
(北海道社会保険中央病院歯科口腔外科)

当科が北海道医療大学歯学部口腔外科学第一講座の関連病院として、平成5年4月に開設以来10か月間に当科を受診した583名の患者について、その動態および有病者の実態を把握するために調査を行った。月別の新患者数は徐々に増加し、本年1月31日現在の総数は583名となっている。特にその中でも院内紹介患者の占める割合が31.9%と高いことから病院歯科としての機能はようやく整い始めたと思われる。初診患者数は40代、50代、20代の順に多く、性差は男性277名女性306名で1:1.1とわずかに女性の患者が多かった。患者の来院経路は、紹介なく外来を受診する患者が393名67.4%を占め、紹介を受けた患者数は本院他科よりの紹介が186名31.9%、他病院からの紹介が4名0.7%であった。本院他科からの紹介患者は内科が56.2%と最も多く、次いで整形外科16.6%、耳鼻科9.7%の順であった。疾患別分類ではう蝕が59.5%と最

も多く、次いで床義歯による欠損補綴を要した症例が19.4%であった。また外傷、顎関節症、粘膜疾患といった口腔外科的疾患も12.5%を占めていた。その他、検診あるいはフッ化物塗付を希望するものや他科疾患と口腔疾患との因果関係についての精査依頼などがあった。全患者中44.4%に何らかの他科疾患を認めた。年代別の有病率は、40～50才代を境に増加する傾向があり60才代以上ではすべて70%以上と高率を示した。90才代は2例で、ともに疾患を有していたため100%となった。他科疾患は、高血圧、心疾患といった循環器系疾患や結核などの呼吸器疾患が多くそれぞれ約25%を占めていた。このことは高齢者では全身状態の評価がより複雑になるとともに、外科的浸襲に対する予備能力の低下を示唆しており、今後、高齢化社会に向けてさらに十分な全身状態の把握と慎重な管理が肝要であると思われる。

30. 歯の動揺度測定法に関する研究

—歯・歯周組織モデルを用いた各種測定法の評価—

横田 光弘, 加藤 義弘, 加藤 幸紀
加藤 熙*, 稲場 昭人, 小鷲 悠典
(歯科保存学第一, 北大歯科保存学第二*)

【目的】歯の動揺度は、歯周組織の罹患状態を反映するとされているが、様々な手法による動揺度の測定値が、支持骨量、歯根膜の幅、歯根膜の性状、および辺縁歯肉の性状など様々な因子のいずれを強く反映しているかは不明な点が多い。

本研究は、歯・歯周組織モデルの静的動揺度、および動的動揺度である歯周組織の周波数分析とペリオテスト値を測定し、支持骨量、および歯根膜の幅との相関性を検討した。

【材料と方法】歯・歯周組織モデルは、歯としてアクリル製ロッドを、歯根膜としてシリコンラバー印象材を用い、ロッドの支持量と印象材の厚さを変えて作製した。

静的動揺度として、モデルのロッドに250gの荷重を加えたときの最大荷重変位量と、荷重を除去したときの残留変位量を計測した。

歯周組織の周波数分析として、モデルのロッドを加振して得られる減衰振動波形上より第一振幅と第二振幅の加速度の比である振動減衰比を算出した。また、パワー